

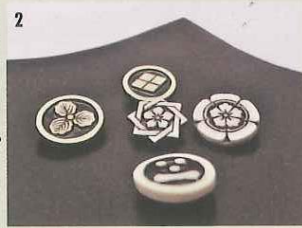
伝統力 亀谷窯業 島根県浜田市

伝統瓦の新展開で 世界に進出！

200年以上の歴史を誇る石州瓦の老舗、亀谷窯業。瓦需要が減少する中、独自商品の「本来待瓦」で、トイレや器などを作るといった新たな展開を試みている。



1 飲食店とのコラボで生まれた瓦で焼く「瓦そば」。耐熱瓦は独自の製法で開発したもので直火にかけても割れない特徴をもつ。2 瓦製の家紋ブローチ。3 わさびを摺りおろす器。4 シャトル窯。亀谷窯業では瓦の堅牢性にこだわり、1350℃で22時間以上焼く。



6 (文化3) 年創業の老舗、亀谷窯業。9代目社長の亀谷典生さん(46歳)だ。亀谷さんは岡山県生まれで、製業会社に勤務

人口約5万6000人で日本海に面した浜田市は、人と文化と自然の調和が取れた県西部の中核都市だ。農業、漁業ともに盛んだが、特に有名なのが石州瓦。三州瓦、淡路瓦と並ぶ日本三大瓦産地の一つで、独特の赤褐色で知られる。

石州瓦工業組合の専務理事・佐々木啓隆さんは言う。「『石州モノ』は凍(い)てに強く水を通さない。とにかく硬くて丈夫な瓦」と昔から瓦職人の間で語り継がれてきた。出荷量は30年前の約4分の1と落ち込んでいますが、一方で新たな動きも生まれています」

その先陣に立つのが、1800枚からでも作るのが売りの。主力商品は瓦だが、需要の落ち込みに危機感を持った亀谷さんは石州瓦及び本来待瓦をさら

後、36歳の時に妻の実家である亀谷窯業を継いだ。「うちの瓦は本来待瓦(ほんきましがわら)といって、石州瓦の中でも特に丈夫で硬いもの。酸やアルカリに強く、塩害、凍害も受けません」

本来待瓦は来待石という釉薬を使い、1350℃の高温で22時間以上火を入れるのが特徴。通常の瓦は1200℃ぐらいで焼くというから、かなりの高温だ。また、大量生産方式は取っていない。オーダーに応じて1



高知のレザースタジオ「森川の舎」。本来待の屋根瓦を製作。初の試みとして、5色の濃淡を付けて昔の登り窯の雰囲気を出した。

「とにかく、どうすれば若い人たちに石州瓦の魅力を伝えられるかについて考えました。悩んだ末に、まず作ったのが壁に張ったり床に敷いたりするタイル。次に、自然豊かで食べ物もおいしい浜田市の飲食店とのコラボレーションを始めました。たとえば、瓦製の器を使ってもらったり、瓦の上で焼く『瓦そば』という新メニューを考案したりなどの試みです」

に広く知ってもらうための戦略を練った。

また、経産省が主催するJAPANブランドプロデュース支援事業「MORE THAN プロジェクト」は今年で3年目を迎えるが、亀谷窯業は2016年度の12プログラムの一つに選ばれた。これまでに培ってきた耐熱瓦の製作技術を生かし、ア

亀谷さんが狙ったのは、タイルや器を通して瓦をより身近なものにすること。屋根から目線をいったん下げて、そのうちに本来の屋根瓦に注目してほしいという思いがあった。



石見地域の家々の屋根を飾る石州瓦の赤色が独特の風景を作り出している。



粘土場の亀谷社長。

あくまでも、瓦をイメージした商品をどんどん追求するという姿勢は変わらない。(石原たまき)

アメリカとオーストラリアのバーベキュー文化に新しい風を巻き起こすもくろみだ。いわば、全世界の器市場に乗り込むわけだが、亀谷さんは「はいえ、うちは陶器屋じゃなくて瓦屋だ」と語る。

取材協力・写真提供：亀谷窯業 <http://user.iwamicatv.jp/honkimachi/>
石州瓦工業組合 <http://www.sekisyu-kawara.jp/>